



しらい・ますみ
ニッセイ基礎研究所主任研究員、東洋大学経済学部教授を経て、2007年4月より現職。バリアフリー、少子・高齢化と地域社会をテーマに、幅広い分野で活躍している。

エネルギーは体系的理解が必要。 国・地域・家庭ぐるみで教育を。

● 関西大学政策創造学部教授 白石真澄さん ● 聞き手：近藤和行(読売新聞東京本社編集委員)



資源に乏しい日本は、より高いエネルギー効率を実現する必要がある。しかし、原子力発電を含めエネルギー問題について、若い世代は情報に接したり、正しい理解をしているだろうか。教育の現場で日々、学生に接している白石真澄さんに聞いた。

今の学生には効率重視の傾向。自発性を身につけてほしい。

最近の学生気質について、どう感じていますか。

大学で7年間、教えてきましたが、二極化している気がします。政治、経済、社会政策にすごく興味がある学生と、青春を謳歌するだけで、何かを必死につかもうという気概に欠ける人。その傾向は年々強まっていると思います。特に後者は、受験勉強など必要に迫ら

れてきたけど、自分の関心・興味が何か分からない。就職面接の前日に、「どんな本を読んだらいいですか」と聞いてくる学生さいます。効率重視の社会で、最短のゴールを求めからでしょうか。人は苦労や回り道をして初めて、真実がつかめる。自分で調べてみる、本を読んでみる。そんな気にさせる教育が必要と感じています。

エネルギー問題も現実には立ち、解決策を見据えた考察を。

地球温暖化やエネルギー問題が、世界の重要課題になっています。

学生の多くは、チェルノブイリ原子力発電所の事故など、断片的な知識はあるんです。ガソリン価格が高騰していた現象も知っています。しかし解決策にまで思考が及びにくい。化石燃料の割合を減らすには何が必要だとか、新エネルギー開発をど

う進めるかという応用問題になると、体系的な理解がないのです。

例えば、エネルギー問題では、日本のエネルギー自給率がわずか4%しかなく、原子力発電が国内の発電電力量の3割を担っている。原子力がないと今の生活水準は維持できない、という現実を理解したうえで、それでは原子力発電をいかに活用していけばいいのか、といったことを考えていく。そのように、日本のエネルギー政策の向かうべき方向について、もつと考察を深め、自分なりの意見を持つようになってほしいと思うんです。

**中長期的な展望ができるよう
専門家や企業側の努力も大切。**

問題は学校教育にあるのでしょうか。エネルギー問題に限らず、体系化した知識を学ぶ機会が少ないのだと思います。社会科学や総合学習の時間に、片手間に教えられている気がします。

もちろん「考えるくせ」「自分で真実を追求する習慣」の習得は、教育現場だけでは無理です。地域や家庭が果たす役割も大きい。

国や企業は、中長期的なビジョンをもつと示してほしい。エネルギー問題なら、将来のエネルギー需給の展望を分かりやすく。リサイクル問題もそうです。原子力の問題にしても、誤解や無理解がいたずらに恐怖心を植え付けることがないように、専門家や企業が、さらに「知らせる努力」をするべきだと思います。

